

## 【概要】

### ハーン作品のドイツ語版とユダヤ系文化人たち

岩本 真理子

#### 始めに

富山大学のヘルン文庫に保管されているハーンの蔵書には、意外なほど多くのドイツ文学作品が含まれている。それらはすべて英語またはフランス語訳であるが、これらの本はハーンがドイツ文学に深い関心を寄せていたことを示している。これを手掛かりの一つとしてハーンとドイツ文学の関係を調査し始めたところ、ドイツ語圏でのハーン受容に関して興味深い事実が明らかになってきた。ハーン作品のドイツ語版が初めて出版されたのは彼の他界の翌年、1905年である。ドイツ語版は1905年の *Kokoro* を皮切りに毎年一冊ずつ出版され、1910年には六巻からなるハーン著作集が出揃った。このドイツ語版著作集を詳細に調べると、ドイツ語圏でのハーン受容にユダヤ系文化人たちが関わっていたという意外な事実が浮かび上がってくる。

#### ドイツ語版に関わった人々

ハーンの著作初のドイツ語版を手がけたのは、ウィーンの翻訳家ベルタ・フランツォス (Berta Franzos 1850年～1932年) である。彼女はオーストリア領ガリツィア地方のプロディ<sup>1</sup>(現ウクライナ領) 出身のユダヤ系女性で、ハーン作品多数とパーシヴァル・ローウェルの『極東の魂』を翻訳している。ドイツ語版ハーン著作集の第一巻となった *Kokoro* には、オーストリアの作家フーゴー・フォン・ホフマンスタール (Hugo von Hofmannstahl 1874年～1929年) が序文を付したが、彼もまたウィーンのユダヤ系文化人であった。さらに、六巻本の装丁と挿絵 (版画) を担当した画家・版画家エーミール・オルリク (Emil Orlik 1870年～1932年) はプラハ出身のユダヤ系オーストリア人であり、主にウィーンで活躍していた。オルリクは1900年4月に来日し、10ヶ月ほどの滞在中に狩野友信から日本の絵画技法を、また版画の摺り師や彫り師から日本の多色刷り版画の技法を学んでいる。

この六巻本は好評だったようで、1911年には作品を抜粋して一冊にまとめた抄本 *Das Japanbuch eine Auswahl aus den Werken von Lafcadio Hearn* (以下 *Japanbuch* と略) が出版された。巻頭にはウィーン出身の作家シュテファン・ツヴァイク (Stefan Zweig 1881年～1942年) による評伝「ラフカディオ・ハーン」が付されたが、彼もまたユダヤ系であり、1934年にナチス政権から逃れて亡命し、ブラジルに移住した後自殺している。

1925年には *In Ghostly Japan* と *Kottō* から六巻本に含まなかった作品を抽出してドイツ語に翻訳した *Japanische Geistergeschichten* (『日本の怪談』) という本が出版された。翻

訳者は『ゴーレム』 *Der Golem (Die Weißen Blätter* 誌に 1913～14 年に連載)の作者グスタフ・マイリンク (Gustav Meyrink 1868 年～1932 年)である。ウィーン生まれの彼はユダヤ系ではないにもかかわらず、女優だった母が同姓同名のユダヤ系女性と混同されていたため、またユダヤ神秘主義カバラの知識を活用して『ゴーレム』を書いたため、しばしばユダヤ系と勘違いされている。このように、六巻本の翻訳者、装丁担当者、序文執筆者、抄本の評伝執筆者すべてがウィーンのユダヤ系文化人であり、その後のハーン翻訳者もユダヤ文化と深いつながりを持つ人物であったことは決して偶然ではない。

ドイツ語版に関わった三人の作家ホーフマンスタール、ツヴァイク、マイリンクには、「ウィーンのカフェ文士」という共通点がある。当時のオーストリアは現在の数倍の領土を持ち、十以上の民族・言語が同居する多文化国家であり、ウィーンのカフェでは数十カ国の新聞や雑誌を検閲無しで読むことができ、文化人たちの情報収集・情報交換の場となっていた。

ウィーンでユダヤ系文化人の活動が盛んだったのは、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の政策に拠るところが大きい。彼はユダヤ人にも土地の所有権や選挙権を与えて平等化を図り、1857 年末からのウィーン大改造に際してはユダヤ系資本家にも土地を売却してその収入を都市改造に充て、文化方面でも画家グスタフ・クリムトのような才能ある人材は民族を問わず採用した。その結果ウィーンには数多くのユダヤ人が住み、ユダヤ系文化人たちが活躍していたのである。さらにユダヤ系女流画家が多数いたなど、ユダヤ系女性の活躍が盛んだったのも当時のウィーン文化の特徴のひとつだった。

#### 〈フランツォス訳六巻本とドイツ語圏でのハーン受容〉

フランツォス訳の六巻本はフランクフルト・アム・マインのリュッテン&レーニング社から *Kokoro* (1905 年)、 *Lotos* (1906 年)、 *Izumo* (1907 年)、 *Kyūshū* (1908 年)、 *Kwaidan* (1909 年)、 *Buddha* (1910 年)の順に出版された。各巻はホートン・ミフリン社のハーンの著作のうち六冊をほぼそのまま訳したものであり、*Kokoro* はハーンの *Kokoro* の全訳 (巻末の Appendix を除く)に加えて巻頭にホーフマンスタールによる序文が付され、*Lotos* は主に *Glimpses of Unfamiliar Japan* 第一部から、*Izumo* は主に *Glimpses of Unfamiliar Japan* 第二部から作品を収録、*Kyushu* は *Out of the East* の全訳、*Kwaidan* は *Kwaidan* の全訳、*Buddha* は *Gleanings in Buddha-Fields* の全訳、さらに各巻末にはハーンの前注の独訳が付されている。1911 年の抄本 *Japanbuch* はツヴァイクによる評伝 *Lafcadio Hearn* を巻頭に置き、*Lotos*、*Izumo*、*Kokoro*、*Kyūshū* から作品を収録している。

ドイツ語版に二人の著名な作家が寄稿した序文と評伝から、ドイツ語圏でのハーン受容について何が読み取れるだろうか。まず、*Kokoro* のためにホーフマンスタールが著わした序文冒頭を見てみよう。

私は電話口に呼び出され、ラフカディオ・ハーンが亡くなったことを知らされた。東京で昨日、あるいは今日の未明か今朝早くかに亡くなったのだ。<sup>2</sup>

ハーンの死を知らせたのが誰だったのかは不明であるが、1904年のハーンの死の直後に書かれたような筆致である。また彼がこの序文で *Glimpses of unfamiliar Japan* や *Gleanings from Buddha fields* といった英語原題をそのまま用いていることから、ドイツ語版以前にハーン作品を英語で読んでいたことが推測できる。

一方、*Japanbuch* のためにツヴァイクが執筆した評伝 *Lafcadio Hearn* を1906年刊行のエリザベス・ビスランド編 *Life and Letters of Lafcadio Hearn* と比較してみると、ツヴァイクが同書を参考にして評伝を書いたことが明らかになる。<sup>3</sup>たとえばツヴァイクはハーンのアメリカ到着を次のように表現している。

この若くて未熟で、何もまともに習ったこともなく、元々虚弱で、しかも片目の19才の少年は、友も親類も仕事もこれといった技能もなく、今やニューヨークの無情な通りに立っている。<sup>4</sup>

この文章が以下のビスランドの文に基づくものだということは明らかである。

Sometime during the year 1869 the exact date cannot be ascertained Lafcadio Hearn, nineteen years old, penniless, delicate, half-blind, and without a friend, found himself in the streets of New York.<sup>5</sup>

またツヴァイクは、ハーンがアメリカ移住直後に移民列車の中でパンを恵んでもらったというエピソードを紹介しているが、これも *Life and Letters of Lafcadio Hearn* に見られるものである。さらに彼はハーンのアメリカ時代について「このもの静かで柔和な人間が『攻撃的な利己心 (aggressive selfishness)』の国でどんなに苦しまねばならなかったかは、筆舌に尽くしがたい」<sup>6</sup>と評しているが、aggressive selfishness は日本移住後のハーンが書簡や作品中で西洋文明を批判する際に度々用いた言葉である。この他にも、ツヴァイクが *Life and Letters of Lafcadio Hearn* を参考にしたと思われる箇所がいくつかあり、彼がハーンの評伝を書くにあたって同書を熱心に読んだことが推測できる。

ドイツ語圏でのハーン受容の状況は公共図書館のデータからも読み取ることができる。ベルリン公共図書館連合とオーストリア国立図書館の蔵書を検索すると、ベルリンでは1927年の

英語版、オーストリアでは 1922 年のフランツォス版以降ハーン作品が途絶え、次に現れるのは第二次世界大戦終了後である。1933 年にヒトラー政権が誕生、1938 年にドイツがオーストリアを合邦し、ドイツ語圏が完全にナチス化してユダヤ人迫害が強まると、ユダヤ系文化人が活動の場から締め出され、悲劇的な状況に置かれたのみならず、ハーンのようなハイブリッド作家が好まれなくなったのであろう。

しかしユダヤ系文化人によるハーン受容は、上海という意外な場所で続いていた。上海はビザ無しで入れる自由港だったため、多くのユダヤ人が迫害を逃れて移住していたのである。1939 年から 1948 年にかけて上海のドイツ・オーストリアのユダヤ人コミュニティ向けに発行されていた新聞『上海ジューイッシュクロニクル』の 1942 年 4 月 16 日版にフランツォス訳の『英語教師の日記から』の一部が「日本の現代教育システム」という題で、また同月 23 日にはフランツォス訳の『おしどり』全文が掲載されている。さらに 1943 年 10 月 3 日には「ラフカディオ・ハーン エッセイ」と題する評伝が載せられたが、そこには次のような記述がある。

熊本で彼は有名な本『オリエントの光』を書いたが、この本はヨーロッパで憤激の嵐を引き起こした。この作品で彼は東アジアの宗教、哲学、風習、習慣が優っていることを証明している。<sup>7</sup>

『オリエントの光』(Licht vom Orient)は *Out of the East* の誤記かと思われるが、このエッセイはフランツォス訳のハーン作品がドイツ語圏で議論を巻き起こしていたことを示す貴重な記録である。それにしても、このような苦難の時期にユダヤ系文化人が亡命先でまでハーンを紹介し続けたのはなぜなのだろうか。ユダヤ神秘主義「カバラ」は一即多・多即一という仏教思想に近い。それゆえにハーンの説く日本の姿や東洋思想、仏教的思想は、ユダヤ人にとってはむしろ馴染み深いものに思えたのだろう。ツヴァイクはハーンの特徴を *Weltbürgertum* (世界市民性)と表現したが、迫害とその結果身につけた世界規模での活動能力ゆえに否応なしに「世界市民」となったユダヤ人たちが、ハーンの世界市民性に共感を覚えたであろうことは想像に難くない。ユダヤ系の人々に関する資料はその多くが失われ、また生存者の亡命や移住によって世界各地に分散している。残されたわずかな資料を捜し求めることで、ハーンとユダヤ系文化人たちの精神的なつながりをさらに解明していきたい。

---

1 ブロディは人口 2 万人ほどの小都市であるが、人口の半数以上がユダヤ系のいわゆる「ユダヤ人都市」である。第二次世界大戦中、ウクライナではナチスによる凄惨なユダヤ人虐殺が

---

行われ、ブロディのユダヤ系住民約 1 万人のほとんど全員が虐殺されている。

2 *Kokoro* (Rütten & Loening, 1905, p.4)

3 *Life and Letters of Lafcadio Hearn* はホートン・ミフリン版のリプロダクト版を(Rinsen Book Co.,1973)、ツヴァイクによる評伝はトロント大学が公開している *Japanbuch* の PDF 版を使用した。

4 *Japanbuch* (Rütten & Loening, 1911, p.4)

5 *Life and Letters of Lafcadio Hearn* ( Houghton Mifflin Company, 1922, Vol.1, p.35)

6 *Japanbuch* (Rütten & Loening, 1911, p.5)

7 *Shanghai Jewish chronicle* は、1942 年 4 月 16 日版、4 月 23 日版、1943 年 10 月 3 日版共にドイツ国立図書館からデジタル公開されているものを使用した。